

第8章 キャリア教育

1 キャリア教育の意義

(1) キャリア教育の必要性

少子高齢化社会や産業・経済の構造的変化、雇用の流動化等が進む中、就職・進学を問わず、子供たちの進路をめぐる環境は大きく変化し、若者をめぐる様々な課題が浮かび上がっています。一方、若者の勤労観、職業観の未成熟や、社会人・職業人としての基礎的・基本的な資質・能力の不十分さなども各方面から指摘されています。

このような中で、様々な課題に柔軟に、かつ、たくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育の推進が強く求められています。

(2) キャリア教育の推進

自らの生き方を考え、主体的に進路を選択できる児童生徒を育てるためには、望ましい勤労観・職業観の育成を図る必要があります。そのねらいの下に提唱されたキャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」*のことです。キャリア教育においては、職業を選択する意志、職業に求められる知識・技能、共同してものごとに取り組む姿勢等、社会適応に向けての幅広い能力・態度を育むことを目指して、日頃の教育活動を体系的に進めることが大切です。そして、キャリア教育を学校の全ての教育活動を通して推進し、児童生徒の全人的な成長・発達を促します。

*「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(中央教育審議会答申 平成23年1月)にある定義

2 キャリア教育の展開

(1) 発達課題と指導内容

キャリア教育は、小学校から高等学校までの組織的、系統的な教育活動です。各校種の発達課題を踏まえた上で、各教科等の様々な教育活動で扱う題材の配置や指導の手順について計画性をもち、各段階での指導内容を明確にしておくことが必要です。その中で社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力〔基礎的・汎用的能力〕として、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」等を育成していくことが大切です。

ア 小学校段階

進路の探索・選択に関わる基盤形成の時期として、自分の将来に夢や希望を抱かせるように指導します。例えば、学級活動や児童会活動では、望ましい人間関係の育成に始まり、生活上の諸問題の解決に向けた学級内の組織づくり等の活動を通して、希望や目標をもって共同して生きる姿勢を形成します。また、道徳の時間では勤労の意義や尊さを理解させながら、学校行事や総合的な学習の時間での社会見学、勤労・生産体験、ボランティア活動を通して社会に奉仕する喜びを実感させるなど、相互に関連を図った指導も大切です。各教科では、生活科や家庭科において家庭での仕事や役割分担について理解する、社会科において地域や我が国の産業等について学習するなどの取組も考えられます。

イ 中学校段階

キャリアの形成に向けて、生徒が、自分の適性を考えたり、職業や志望校・学科について調べたりする学習を通して、自分にふさわしい進路を主体的に選択できるように指導します。そのためには、進路相談室や進路コーナーを整備して生徒に活用を促すことや、職場体験や体験入学等の啓発的な活動を実施します。また、進路について調べたことや進路相談の記録を、3年間にわたりファイルしていくことにより、継続的、発展的にキャリアに関する学習を進められるようにします。なお、個別指導の際は、生徒に肯定的に自分を理解させるように配慮し、将来について夢や希望を抱かせることを大切にします。

ウ 高等学校段階

就職や進学を目指す生徒にとって、職業の特徴を調べ、自らの適性を踏まえて将来について具体的に考えさせることが重要です。加えて、生涯にわたりキャリアを発達させる態度を育むために、自己理解の仕方と進路に関する情報収集・活用の方法を身に付けさせる指導や自己実現に向けて努力させることも大切にしたいことです。例えば、社会人・職業人を学校に招き、講話や懇談会を通して、キャリアを形成していく際に求められる能力や資格要件等の情報を得させること、また、資格や学部・学科に関して調べたことを蓄積させながら、インターンシップ、オープンキャンパス等、進路について試行する機会を活用させることは有効です。

＜ 小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達 ＞

	小学校段階	中学校段階	高等学校段階	
就 学 前	＜ キャリア発達段階 ＞			大 学 ・ 専 門 学 校 ・ 社 会 人
	進路の探索・選択にかかる 基盤形成の時期	現実的探索と 暫定的選択の時期	現実的探索・試行と 社会的移行準備の時期	
	<ul style="list-style-type: none"> ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望、憧れる自己のイメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての勤労観・職業観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加 	

(「小学校 キャリア教育の手引き 改訂版」文部科学省 平成23年5月)

(2) 学級活動及び教科学習との相互補完

キャリアを形成する態度を育成するためには、職業や進路等キャリアに関する学習と学級活動及び教科(科目)の学習との相互補完性を重視することが大切です。

学級(ホームルーム)活動等で行うキャリアに関する学習は、将来の生き方について考えを広げ、深めていくことがねらいです。その学習の展開では、進路についての共通の悩み・課題に焦点を当て、みんなで考えながら学習を進めるとともに、児童生徒一人一人に自分の在り方を考えさせるようにします。また、児童生徒による自己評価やポートフォリオ(活動記録のファイリング)等を蓄積して、正しい自己理解に役立てさせます。そして、将来の職

業や進路について考えさせる際には、自分の将来について夢や希望をもち続けさせることを大切にします。これらを通して、児童生徒は自分の将来について真剣に考えるようになり、学習に取り組む姿勢の向上にもつながります。

一方、各教科(科目)では、それぞれの特性を生かして、進路への関心を高揚させる学習活動を心がけます。例えば、学んだ知識が実際に役立つような体験的・作業的な学習を日頃の学習活動に取り入れることで、生徒のもつ能力を引き出します。

(3) 進路相談の充実

進路相談は、将来について共に考えることで進路への関心を高め、また個別に指導し援助することでキャリア発達に向けて必要な能力や態度を培う大切な機会です。その際、次の点に留意して、進路相談の充実に努めます。

- ア カウンセリングの基礎的な技法を身に付けることで、受容的な態度で接し、生き方や進路に関する悩みを十分に受け止める。
- イ 進路に関する適切な情報を与え、共に考えながらも主体的に問題を解決しようとするまで待つことで、自らの意志と責任で選択する態度を育成する。
- ウ 進路について幅広い視野から適切にアドバイスができるように、事前に、職業や産業社会等に関する知識を身に付けておく。

(4) 地域社会や保護者との連携

ア 地域社会との連携

地域社会との連携の下に、職場体験や講演会等を取り入れることは、体験的に情報を収集・活用することができるだけでなく、地域の人々との触れ合いを通して、自らの生き方を考えさせ、望ましい勤労観や職業観を育てるために有効です。

職場体験については、地域の人々の協力の下、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」「高校生インターンシップ制度推進事業」等の機会を活用します。実施に当たっては、受け入れ先との打合せを綿密に行い、体験の意義や心構え、作業中の安全への注意等について事前指導を十分に行う必要があります。また、実体験の感動が一過性のものとして薄れないように、内面化、共有化を図る事後指導を徹底することが大切です。

イ 保護者との連携

進路に関する保護者の考え方は、児童生徒のキャリア発達に大きな影響を与えます。そこで、授業参観や保護者会、「進路だより」等を通して、学校のキャリア教育の方針や指導内容について伝え、理解を深めてもらうようにします。また、保護者会や三者面談では、保護者の意見も十分に聞きながら懇談を進め、児童生徒が家族の理解と支援のもと、生き方や進路について考えていけるようにします。

<参考になる資料>

- ・「キャリア教育を『デザイン』する」国立教育政策研究所 平成24年8月
- ・「小学校キャリア教育の手引き 改訂版」文部科学省 平成23年5月(教育出版)
- ・「中学校キャリア教育の手引き」文部科学省 平成23年3月(教育出版)
- ・「高等学校キャリア教育の手引き」文部科学省 平成23年11月(教育出版)
- ・「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中央教育審議会答申 平成23年1月
- ・「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」パンフレット 国立教育政策研究所 平成26年3月
- ・国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター

http://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09-shido.html